

スポーツ振興座談会

目指せ「学生・日本一！」
高めよう
「オール中央」の一体感！

いま何が必要で、何が足りないか――。

硬式野球部、水泳部、陸上競技部駅伝の
3監督が熱く語る

スポーツ強化で、中大人の心を熱くし、「オール中央」の一体感を高めようと、創立125周年の重点事業の柱のひとつに掲げられているのがスポーツの振興だ。輝く「学生・日本一」を達成すれば、中大を広く社会にアピールすることもできる。そのために何が必要で、何が足りないか。スポーツ担当常任理事の林茂樹文学部教授の司会で、スポーツ振興特別支援対象になっている硬式野球部の高橋善正監督、水泳部の高橋雄介監督、陸上競技部駅伝の浦田春生監督に忌憚なく話し合っていた。

出席者

高橋善正
硬式野球部監督

高橋雄介
水泳部監督

浦田春生
陸上競技部駅伝監督

(司会) 林茂樹
常任理事



林茂樹常任理事

林 中央大学が2010年に創立125周年を迎えるにあたりまして、大学全体の目標の一つとしてスポーツの振興を挙げています。とくに硬式野球部、水泳部、陸上競技部の箱根駅伝を中心とした長距離の選手強化のための支援策をやってきて、それが昨年、それなりの成果が上がったと思っています。硬式野球部は2部から1部に昇格しました。水泳部も11連覇という輝かしい実績を残されたあと3度優勝を逃しましたが、昨年は頑張って12回目の優勝を飾りました。

駅伝につきましては、今年1月の箱根駅伝は、

ぎりぎりシード校に入れたということでしたが、これは相対的に他校が箱根駅伝に力を入れてきた面があつて、それで若干、中大は立ち遅れたのかなという印象を私は個人的には持っています。

しばしば中大のOBと話をしますと、母校のスポーツに大きな関心があり、特に箱根駅伝はどうなんだという話がよく出ます。駅伝だけではありませんけれども、やはり全国制覇なり、優勝を飾っていただくことが、OBにとつて非常にありがたいことですし、母校を思い起こす有力なきっかけになるのではないかと思います。

今日は、根底に学生スポーツということを置いていただいて、その中でどう心身を鍛え、スポーツとしての力量を最大限に持つていくかということについて伺えればと思つています。順番にお話を承りたいと思います。まず、硬式野球部の高橋監督は、ご就任いただいて2年になりますね。

昨春、1部復帰した硬式野球部 基本を徹底的に身につけさせる

高橋(善正) 2年目です。

林 この2年、どのようなお考えで選手を鍛えてこられたのでしょうか。

高橋(善正) それは、やれることをきちっとやり出しただけの話です。バントなり、全力で走るとか、そういうことを徹底的にやらせました。そうでないと、今の中央に来ている選手の資質や

レベルは、6大学や他の東都の亜細亜、東洋、駒澤さんなどと比べると、やはり低いんです。

林 そうですか。

高橋(善正) はい。資質が低いんです。けど資質が低いから負けて当然というわけにはいかないわけで、どうにかしていかねければならない。それには打つたら全力で走るとか、バントなど、基本的なこととはきちっとやるということを、徹底してやらせるだけです。なるべくミスをしなくて、少ない点数で抑えることで勝負になるということです。大きい声を出すとかが、そういうことをやらせたことで、チーム全体として少し活気が出てきたし、スピード感が出てきた。

今、3年生のピッチャーで、来年はもしかしたらプロに行けるかなという子がいます。やはり目



高橋善正・硬式野球部監督

1944年高知県生まれ。高知商業から中大に進学。東都大学野球リーグで35勝15敗、188奪三振、防御率1・61の好成績を残した。66年に東映入団。67年に15勝で新人王、71年には対西鉄戦で完全試合を達成。73年巨人へ移籍、77年に現役引退。通算成績60勝81敗7セーブ。引退後は巨人、中日、日本ハム、横浜大洋、社会人シダックスの投手コーチを務め、07年に中大のコーチ、08年に監督に就任した。

標になるような選手がいないと、弱いなら弱いなりに慣らされてしまつて、ちっと

もうまくならない。少し上のレベルの子がいると、その子のほうに向かつていきますので、レベルアップします。

もちろん学生ですから、授業に出て卒業することが当たり前なので、清水(達也)前監督のときから最低限50単位を2年生で取つていないと、3年生のときは野球をやらせないことにしています。



「基本をしっかりと」と高橋硬式野球部監督

今の子は、こちらがきつちりやらせれば、やるようになる。これは昔からある指導方法で、私が特別なことをやっているとも思っていない。要するにだめだったり、違うことをしたときには、しっかりと罰則を与えてやらせる。

林 ペナルティをかける。

高橋(善正) ええ。グランドを何十周も走らせるとか。そういうことをやらせると、やらなければいけないことをきちつとやるようになる。

インカレで12回優勝の水泳部 世界で戦える選手育成が目標

林 水泳部の高橋監督はいかがですか。水泳部は11連覇という栄えある成績を収められて、その後は3年間、日大に負けましたね。あの悔しさは、



高橋雄介・水泳部監督

1962年9月生まれ。バタフライの選手として全中・インターハイで優勝、中大では主務を務める。トヨタ自動車勤務を経て、米アラバマ州立大にコーチ留学。1991年中大水泳部コーチに就任。留学で学んだ科学的トレーニングを取り入れ、強豪チームに育てる。インカレ11連覇(1993年~2004年)、2008年には4年ぶりのインカレ総合優勝を飾る。中大理工学部准教授。JOC強化スタッフ、日本水泳連盟競泳委員。

監督はもちろんのこと、選手も何かかして思っていたのでしようけれども、いかがですか。

高橋(雄介) 水泳界では、日本大学の10連覇というのが、今まで一番長い連覇なのです。だから、とにかく11連覇したい。そうしないと、「水の中央」ということにならないのですから、必死にやっていたわけです。11連覇した次の年に気の緩みだったり、何かおごりもあつたかもしれない。それで3回負けたんですが、その中には、同点で負けたという悔しさもありました。

けれども、その負けた中で、選手が腐っていくのではなくて、いい伝統は残し、こんなことではだめだと、そこから改革していくわけですね。もっと科学的にとか。もっと栄養面などいろいろなことに注意を払っていかねければいけないだろうとか。そうして成長していくわけです。それで去年(2008年度インカレ男子)、勝てないだろうと言われた中で優勝したんです。

林 何かしなければならぬいと頑張ったのは、選手の内発的な意識なのか、あるいは野球部の高橋さんのように、何かまづいことをやればペナルティを与え

るといふ罰則方式で高めさせていったのか。その辺はどうですか。

高橋(雄介) ある程度、レベ



「世界に挑む選手を」と高橋水泳部監督

ルの高い選手たちが集まってきていたのに、なぜ負けたのかというと、学生で一番になろうと思っただけでは勝てないということです。さらにその上の目標を達成したり、上のレベルに行っている選手を多く輩出するようでない、チームも弱くなってくる。

結局は世界で戦えるような選手を育てない限り、学生でも日本一になれないということです。ですから、インカレで勝つその前に、世界で戦う選手を一人でも多くつくり出そうという目標を掲げて

やっているわけですね。

群雄割拠で戦国時代の箱根駅伝 精神的なひ弱さの克服が課題

林 なるほどね。では駅伝の浦田監督に伺いますが、かつての栄光を忘れることができない多くのOBたちから、何とか箱根駅伝で優勝してもらいたいということを、どこでも聞かされます。私は今年も箱根と一緒に行きましたけれども、スタートからゴールまで往復で、中大生の父母なりOBの応援が、他大学以上に多いということを前から感じていました。選手にとつてそういうありがたい人たちがいることを、あまり圧力に感じず、励みにして学生が頑張ってくればいいのですが。

浦田 日本一なり、1位を目指すには、どの競



浦田春生・陸上競技部駅伝監督

1962年3月熊本・天草市生まれ。九州学院高3年でインターハイ5000メートル出場。中大に進学、箱根では2年で4区8位、3年で1区3位。1984年中大卒業後、本田技研(現ホンダ)に入社、91年世界陸上(東京)1万メートル11位、92年バルセロナ五輪1万メートル14位。引退後、7年間、本田技研監督を務め、07年夏から中大臨時コーチ、08年4月から駅伝監督に就任した。中大職員。

技もそうだと思うんですけども今は戦国時代にあると思います。駅伝の場合には、特に箱根はマスコミも含めて、ちょっと異常な盛り上がりをしているのは事実です。その中でも、中大の関係の方たちの応援は、励みになる場所でもありますが、期待に応えなければならぬということも確かにあります。

ただ、自分の学生時代から比べると、学生のレベルは、かなり上がっているんですけども、箱根の戦い方をみると、逆にひ弱になっている部分もある。それは戦国時代なので、選手にプレッシャーがかかりすぎていて、箱根駅伝で途中棄権するチームが出てきているところにも表れているかと思えますね。

林 それは精神的な意味でのひ弱さですか。それとも体力なり、忍耐力なり、どの辺のひ弱さですか。

浦田 恐らく精神的なウエイトが大きいと思います。選手は箱根に出たい一心で、多少体調が悪くてもなかなか自発的に言わない。その辺は、監督も含めたスタッフが、しっかり見ていかなければいけない部分ではありますけれども、逆に素直に言えるようなチームの中の関係もつくっておかなければいけないと思います。



「精神面を鍛える」と浦田駅伝監督

記録については、各区分の新記録が出たり、年々上がってはいるんですけども、それでも学生で世界に通じるような選手がなかなか出てきていない。去年の北京オリンピックに早稲田(当時)の竹澤健介選手が、40何年ぶりかで出ましたけれども、それぐらいで、実は日本のトップクラスでいうと、まだまだ学生のレベルが低いのです。ただ箱根駅伝にはマスコミはじめ熱狂的なファンが殺到するものから、選手も少し勘違いしているところもあるのではないかなと思いますね。

「情熱野球で勝つ
『言葉の鉄拳』」
硬式野球部、
高橋善正監督が
熱血指導法を上梓

硬式野球部の高橋善正監督が7月末、「情熱野球で勝つ『言葉の鉄拳』」(ベースボール・マガジン社新書、定価840円+税)を出版した。

08年1月に中央大学野球部監督に就任してすぐの東都大学野球春季リーグ戦で、6季ぶりに1部に昇格させた高橋監督は、その前のコーチ時代を含めると中大で指導するようになって3年になる。

言葉の鉄拳

本書は、中大で投手として35勝をあげ、プロ野球の東映、巨人で活躍した著者が、アマとプロの経験を踏まえて生まれた現代の若者に対する「善正流熱血指導法」だ。高橋監督は、本書のまえがきで、次のように書いている。

監督就任にはしゅん巡したが、預かった以上は「強い」「きちっとやらせる」と決意した。その厳しさは、いまの世の中の流れとは逆行するかもしれない。「楽しくやる」というのは賛成できない。したがってオレのやり方は、たぶん敵をつくるだろうし、嫌われもしようが、覚悟のうえで。 (中略)

なにごととも、徹底してやらなければ目標には到達できない。楽しては絶対に勝てない、と思っている。ましてや野球はチームプレーです。自分さえよければ、という考え方は通用しない。苦しんで、徹底的にやったとしても勝てない保証はない。だが、肝心なのは、その過程だ。どこまで取り組んだか、自分の力を出しきれたか。そこに人間の価値が生まれる。

本書は、第一章 自己責任と徹底管理▽第二章 過保護の学生たち▽第三章 どうすれば試合に勝てるか▽第四章 能力が伸びる「考え方」▽第五章 練習は嘘をつかない一で構成。高橋監督は「野球の上達を目指すのは、立派な社会人になるための修行なのである」と強調、全編で野球を通じた教育論を展開している。(編集室)

あの手の手で有望選手取り合い
要望多いスカウトマンと資金援助

林 中大ではとにかく何が何でも箱根駅伝といふところがあります。そこでいかがでしょうか。

かつて6連覇(昭和34年〜39年)したときと比べるのは、失礼な言い方ですけども、中大の長距離が低迷しているかなという感じを受けますが。

浦田 そうですね。6連覇のあとから、32年優勝から遠ざかって、そして13年前(平成8年)に優勝して、また結構苦しんでいる状況になっています。ここ10年ぐらいで新興大学はじめ名門と言

われる大学も含め、箱根で優勝するために、それぞれ特徴を出してきているということですね。

林 そうですね。優勝候補と言われている大学でも必ずしもいい結果を出せない。さらに何連覇するというのは、少なくなりましたね。

浦田 箱根駅伝に出場できるのは学連選抜を入れると20校で、単独の大学19校が出場できるので、箱根出場を目指して強化している大学は30チームぐらいあって、少しでも優秀な高校の選手を取ろうと動いているんです。1学年で400名ぐらいの選手が、箱根を目指すために関東の大学

に来ていこうことですね。各大学は本当にあの手この手を使って、有望選手を取りに行っていますね。

林 今年1月14日に理事長、学長が、監督、コーチをお呼びして、大学のスポーツに関する基本的な姿勢についてお話をされ、そして私のほうから各スポーツ団体の要望、希望、苦情なりを出してほしいということで、出していただきました。その中で、何とか優秀な学生を取りたい。そのためにはスカウト専門の人間と、やはり金が必要。何とかしてくれという共通した要望が多くあります。

資質ある選手をとるのがカギ
資費タダで小遣い出す大学も

高橋(善正) どのスポーツもそうですけれども、やはりスポーツというのは、資質で決まっています。走るのが子供の頃から速い子と遅い子では、ウサギとカメのウサギのように休んでいる子は別だけど、カメが勝つことは絶対ないんですよ。そうすると、資質のある選手をどれだけ集めて、いい練習をさせるかということになってしまっている。早稲田はスポーツ科学部をつくって、そこへ有望選手を入れて、野球も強くなりましたし、他のスポーツも強くなってきた。それで大学の活性化ができる、学生もどんどん集まってくる。早稲田は再来年に入ってくる選手を今年の11月に、監督がもう決めてしまっているんです。その

ぐらい早い。監督指名で、3人か4人をとれるんですよ。東都でも学費免除とか入学金免除はもう当然のことで、寮費はいらぬ、小遣いをあげま

すという大学もある。

林 あるらしいですね。

高橋(善正)

はい。そうすると中央よりも、

そちらに行つたほうがいいと。

親御さんの考え方で言えば、

そうだろうと思います。中央

の中では我々は恵まれていま

すけれども、他の大学と比べ

たら、はるかに遅れてきてい

るということですよ。

高橋(雄介) 他大学では、

学費免除が何名というのは、

普通のクラブでも持っている

という感じですね。中大では

この3部が特別にしていただ

いているということ、何と

かぎりぎり戦えるということ

ですかね。

林 そうすると、無名の選

手をスカウトして、入学させ

て鍛えたら、ワーツと伸びる

ということ、あまりないとい

うことですか。

高橋(善正) いや、そう

いうことではないです。たと

えば、甲子園に出たからと

いつて、みんなうまいわけ

はないのです。負けてしまつて甲子園に出られない子でも、大学に入ってワーツと伸びる子もちらんいるわけです。

実績ないと推薦で蹴られる有望選手

認めてほしい数名の監督推薦枠

林 それはありますね。チームプレーですから。

高橋(善正) だから、そういう子を連れてく

ればいいわけです。その辺は大学側の柔軟性と、

あとは現場の監督をどれだけ信用してもらえるか

ということですね。たとえば1回戦で負けた子で

も優秀なので、取るというと、大学側から「1回

戦で負けているから…」とスポーツ推薦で言われ

る。

林 推薦基準がありますからね。

高橋(善正) ええ。そのところは、現場の

監督の見た目を信用してもらつて、優秀な子とい

うことでオーケーが出るようなシステムを考えて

もらわないといけない。

弱つてるときというのは、なかなか選手は来

ないわけです。野球部も2部に10年ぐらい低迷し

ていたことがあって、いい選手が寄つてこないとい

うことがあります。そうすると、ますます苦

しくなつてきてしまう。その辺を少し、学校法人

の側も柔軟にしてもらつて、やらなければいけな

い。

林 スポーツ選手としての能力なり実績と、中



バックの棚には優勝カップが並ぶ



工事の無事を祈る出席者

というのが学員の願いです。地域の人たちから『頑張れよ』と言ってもらえるような、町の人にも愛される寮になってほしい」と激励した。

乾杯のあと挨拶した陸上競技部の小栗忠監督は、「チームワークを大事に部全体がひとつになって箱根の総合優勝を目指して、万全の態勢を整えていきます」と述べ、決意を新たにした。また駅伝の浦田春生監督は、「箱根で優勝できるチームをつくるのが大学の願いと自覚しています。十分すぎるほどの環境で、いま以上に練習ができるので、よい結果が出せるように頑張りたい」と抱負を語った。

「東豊田寮」は、鉄筋コンクリート造りの5階建て。1階は食堂・ミーティングルーム、トレーニングルーム、マネージャー室、浴室などがあり、2階は監督室、コーチ室などがあり、部員が入る寮室（ふたり一部屋でベット付き）は2階から5階にある。3階には学習室もつくられ、「文武両道」の環境が整う。平成22年3月末に完成する。

寮からはロードを走るにはもってこいの浅川の土手がすぐ近くで、抜群の練習環境にある。

(編集室)

央の場合には学力も推薦枠の一つの基準になっていますね。それはどうですか。非常に大きなネットワークになるのか。たとえば3.5以上とか、4.0以上とかありますね。

高橋(雄介) 今は3.0ですね。

林 その辺だったら、まあまあいいですか

高橋(善正) まあまあですね。

林 先ほど高橋(善正)さんがおっしゃりたかったのは、中央大学のスポーツ推薦の制度なり方法論として、監督推薦をたとえば3名まで許すというようなことが、新たにできればだいぶ違うということですか。

高橋(善正) そうですね。

林 早稲田はそれをやっているわけですね。あるいは他の大学でも。

高橋(善正) はい。

「東豊田寮」建設で期待高まる駅伝

素晴らしい環境に選手意識を高める

林 そうですか。先ほど大学に、特に法人に対するご注目を承りましたが、ご承知のように、東豊田(日野市)に陸上競技部の新しい寮を建設中で、来年3月中旬頃には完成します。今まで以上に大きな期待が出てくるのですが、その辺の心構え、

覚悟はありますか。

浦田 寮を建てていただいて、選手も本当にありがたいと思っています。今度はそこで暮らす選手の意識とかも含めてしっかりしていきたいいけない。大変いい環境に移ったけれども、そこでやる選手の気持ちがいっしょかりしていないと、うまくいかないと思います。その辺は、我々もしっかりと選手を教育していかなければいけないなど思います。

林 そうですね。素晴らしい施設ができるがゆえに、何が何でも勝ってもらわなければいけないのが、一般的な期待ですけども。

浦田 箱根駅伝を目指している他大学を見ると、南平寮(学友会体育連盟学生寮)のような(いくつかの運動部が合宿する)形の寮はないんですね。

林 つまり単独の寮というのが、一般的な状況ですか。

浦田 駅伝部の寮か陸上部の寮で、単独の寮です。ですから、選手の勧誘のときに南平寮を見せた瞬間に。

林 これは嫌だと(笑)。

浦田 中大には行きたくない(笑)。

高橋(善正) 今の子は、やはりそういうことにすごく敏感というか、野球だとグラウンドにしても、国士館や東洋などは、神宮球場と同じ人工芝ですからね。

陸上競技部「東豊田寮」の地鎮祭 鉄筋5階建てで、来年3月末完成

陸上競技部の新しい寮となる「東豊田寮」(中央大学学友会体育連盟東豊田寮)の地鎮祭が7月17日、日野市豊田の建設地で、久野修慈理事長、永井和之総長・学長ら大学関係者はじめ、設計・施工者など約50人が出席して厳かに行われた。

神主による修祓にはじまり祝詞奏上などの神事では、地鎮の儀で久野理事長らが鉄入れを行った。また久野理事長、永井総長・学長、高木丈太郎学員体育会会長らがそれぞれ玉串を奉奠。最後に出席者全員がお神酒を拝載して、新築工事の無事を祈った。

神事を終えたあとの直会で挨拶に立った久野理事長は、山や川、田んぼなど自然に囲まれた建設地が素晴らしい環境にあることを強調。「東豊田寮から素晴らしい選手が出て、中央大学の名を高めてくれると確信している」と期待を込めた。

また永井総長・学長は、「素晴らしい場所に素晴らしい建物ができることを大変うれしく思っています」と述べて、関係者らに感謝。また、新しい寮の建設で活躍が期待される駅伝選手らに向けて、「箱根駅伝で素晴らしい成績をおさめてほしいと



神酒を拝載

教育上、至れり尽くせりは疑問

大学と現場とが協力しあう時代

林 至れり尽くせりという感じがしないわけでもないです。ただ私は、教育者として、あるいは中大の文武両道という伝統的な考え方からすると、贅沢で、ちやほやして、何もかも与えて、条件整備をして、それで優秀な選手を育てるということが、長期的に続くかどうかよつと疑問です。つまり彼らの一生なり人生を考えた場合に、そういう育て方で果たしていいのかなというところは、疑問を感じるのです。

高橋(雄介) 僕は、野球には、プロがありません

すし、駅伝も特に箱根は、もうビジネスですから、大学もそれをビジネスとして考えていますよね。中大ももちろん考えていると思うし、他の大学もみんな考えているわけです。ですから、その辺はすごく大変だと思っています。

ただ、水泳に関しては、強化3部に入っていることが僕はすごく光栄なんです。他の大学で水泳が入っているところは、ほとんどないんですよ。

林 それはやはり口連覇されたという、その伝統の強みといえますかね。

高橋(雄介) すごく光栄です。ですから、勧誘なんかも、(他大学と)対等にやらせてもらえ

ているのでいいのですが、先ほども言いましたように、法人と現場サイドが協力し合いながらやっていくという時代になってきています。学校法人サイドも入学志願者数が増えるとか、知名度上げられるわけですから。だけでも地方に行くと、中央大学を知らないんですよ。本当に「ええっ?」と言うぐらい知らない。

高橋(善正) 実際に、そうでしょうね。

高橋(雄介) びっくりします。こちらは知っているつもりで話しているのだけでも。

高橋(善正) 結局、法曹界にどんなに強い人がいても、地方に行くと圧倒的多数が、弁護士さんなどにまったく関係のない生活を送っているわけですよ。だから、全然知らなくて当たり前みたいな(笑)。

林 スポーツ選手のほうが目立ちますからね。

高橋(善正) 新聞の地方紙だと、2部にいたら一切出ないですよ。1部が上がって、初めて中央大学と出て、得点が載っている。野球部のOBでも2部に長いこといると、だんだん興味がなくなってしまう。だから優勝となると、ワーツとなる。箱根駅伝なんか優勝したら、それこそすごいことになると思う。

高橋(雄介) そう思います。すごいと思います。待っているんですからね。水泳に関しては、それがオリンピックなんです。オリンピックだけは、水泳はメジャーになるんですよ。ただ、やはり世

界で戦える選手を出さないと、宣伝にならない。だからそういう選手を育成しないといけない。それは、すごく思いますね。そうしないと、中央大学のためにならないですよ。

将来見据え「文武両道」に励む駅伝

林 陸上はいいですか。たとえば伝統的によく言われている「文武両道」というスローガンは、もう古めかしいのか。そんなものは、もう捨ててしまったほうがいいのか。それとも新しい「文武両道」の道があるのか。その辺はどうお考えですか。

浦田 確かに他大学との競争の中では厳しいかもしれませんが、中大のいいところは、しっかり授業に出て単位を取って、その中でも競技レベルを高くしていくというのは、私はいいい考え方



林常任理事と3人の監督

だと思っています。選手には、授業は必ず行つて単位を取ると言うことを率先して言っています。今年卒業した4年生の選手も、全員ちゃんと4年間で卒業して、就職も決まって、そういう選手が代々続いていくような指導はしていきたい。

林 かつて藤原正和君（2003年卒駅伝OB、現ホンダ）が文学部で、総代で卒業しましたからね。

浦田 陸上の場合、実業団に行つても、せいぜい長くて10年、現役をやればいいんですよ。そのあとは、どうするかというと、過去の栄光だけでは生きていけないですから、やはりちゃんと仕事をやらなければいけない。そのときに、



「文武両道を」と林常任理事

大学時代にしっかりと勉強もやって、競技もやってということが生きてくると思っています。

林 それは生きてきますね。

専用球場でなく、練習時間に悩み ナイター練習ができないグラウンド

高橋（善正） これはもう、卒業するというのは当たり前前で、何しに大学に来たのかということになりますから。今の子のほうが、我々の頃より、そういう意味でいえば、「武」はだめかもしれないけれども、「文」ははるかにいい。

授業にはほとんど行かせていますが、全員そろわないので練習時間がむずかしい。うちは、木曜日と金曜日は体育の授業でグラウンドを使うので、リーグ戦の前の練習ができないこともあります。専用球場でないのは、東京6大学と東都12大学のなかでうちだけです。

それに、授業に行かせたら全員そろわないから、朝練をやらなければならない。ナイターで6時とか7時からやらなければならない。ところがナイターでやろうと思うと、高く上がったボールが消えてしまうので、とても危なくて、バッティング練習などはできない。

林 中途半端なナイター（照明）なんですね。

高橋（善正） そうですね。（照明塔の）背が低いから上を照らさない。そうすると、ナイター練習ができない。だから文武両道で練習もさせなけ



スポーツ振興を熱く語る

ないと、ということはありませんね。

応援に行かず、関心薄い一般学生 イベントで仕掛け、ファンづくりを

林 それは法人に対する注文と受け止めていいかと思えます。

もう一つは、一般学生に大学スポーツに興味を持たせるには、どうしたらいいかということです。伝統的な大学スポーツには野球の早慶戦とか、ラグビーの早明戦とかがありますが、中央の場合は、注目するようなものが残念ながらありません。だからというわけではありませ

んが、一般学生の大学スポーツに対する興味なり、関心なり、ひいては応援に行くというようなことが、どうも希薄ではないかということを感じますが、その辺はいかがですか。

浦田 確かに、それはあると思えます。今の時代の学生の氣質が、みんなでワーツというようなものではなくて、結構、こじんまりとまっつてしまっているようなところがあつてなかなか難しい。競技をやっている我々からすれば、競技成績を上げて、本当に頑張っているというところを結果でも見せていかないとなかなか難しいところがあるのかなと思います。

林 学生の関心を引くには結果をだすことだと。浦田 それが一番、我々がやらなければいけな

ればいけない、授業にも行かせなければいけないとなると、そういう時間帯しか練習できなくなってしまうのです。

それと5年以上前から、寮のすぐそばの空地にトレーニングルームをつくって欲しいと言っています。近くにトレーニング場があれば、寮に帰って食事をして、そのあと夜9時とか10時まで筋力アップとかそういうことが常にできるわけですね。

林 なるほどね。

高橋(善正) 寮からグラウンドまで来てやっている、それは難しい。結局、先生が言われる文武両道、中央の伝統を維持していこうとすると、練習をしやすいようにということを考えてもらわ

いことかなとは思っています。いくら、この大会がありますよということで、ピラとかでPRされても、なかなか学生がそこに行こうというような状況は今はずれないのかなと。

林 箱根駅伝は、最初に申し上げましたようにOBも父母も現役の学生も地域の人も、中大の応援が一番ではないかと思うぐらい多いですね。昨年の水泳の選手権のときも、応援団はやはり中央が一番多かったのではないかと思うんです。とくに学生よりも父母の応援はすごいと思います。ところが、一般的に言って現役の学生があまり関心を示さないというのはどういうことですかね。

高橋(雄介) やはり昔とは違うんですね。どういうことが違うかという点、見に行こうと思えば、プロ野球を見に行けるし、サッカーも見に行ける。楽しいことがいっぱいある中で、大学のスポーツを見に行つて、それが楽しいかといったら、それはどうなのかなと。

ですから、やはり仕掛けていかなければいけない。水泳でも北島康介(五輪金メダリスト)以来、すごい人気なんです。日本選手権とか、チケットも全部売れてしまうんです。だけど、何もしないで来てくれるかという点、そんなことはないです。ものすごい仕掛けをするわけです。テレビを使って、今のバック(背泳ぎ)の入江陵介(近畿大学)をぼんぼん出す。かわいい子ですから、ファンが付くわけです。ですから、もつともつ

と大学の中でイベント的に仕掛けていく。

林 スターをつくるということですか。

高橋（雄介） スターというよりも、学生の中のファンをつくっていく。

応援多ければ選手も意欲湧く

試合日以外でも公休扱いに

高橋（善正） 野球に関しては、なかなか学生



が応援に来られない事情があるのです。東都はウィークデイに試合をやるわけですよ。僕は監督会議で言ったのです、学生野球なのに、学生がスタンドに来ないでどうするんだと。

林 それはそうですね。

高橋（善正） 2部は、なんで神宮第2（球場）でやるんだよ。うち（中大）の球場のほうが、はるかにいいわけですよ。そうすれば、土日できる。土日にやるようにすれば、キャンパスの近くなら学生は来ます。使用料が要らないから、入場料300円とか500円とか取ればいいだけの話で、そうしたら来る。たとえばうちの澤村（拓一投手Ⅱ商学部3年）みたいに多少人気の出たような選手がいれば、やはり学生さんもね。

高橋（雄介） それは来ますよ。

高橋（善正） 東都大学野球連盟そのものが、全体的にどうするかを考えると、いつまでも「実力の東都」と言っても、人気は6大学には絶対に敵わないんだから、もっと違う方法を考えていかねばいけない。要するにお客さんと呼ぶことを考えないと、選手も意欲が湧いてこない。人がいるからいいプレーができてくる部分は、いっぱいあるわけです。

大学スポーツに学生の目を向けさせるには ...

林 部員全員を公休扱いにして全試合をやるというのは、難しいでしょうけれども。

高橋（善正） 東都の1部は火、水、木がゲームで、選手はゲームの日を公休扱いなので、試合前日の月曜日を公休にしたらええと、前日の練習ができるんですよ。東洋と亜細亜は、リーグ戦中は練習を含めて全部、公休だそうです。

**掲示板で優勝、試合日程を広報
学校上げて宣伝し、盛り上げを**

林 そうですか。中央の場合は、試合日でなければ公休扱いしないということですから、その辺を改革する必要がありますね。これは、制度の問題で検討する必要があると思います。

あとは一般学生にアピールする方法ですが、たとえば、どのチームが、いつ、どこで、何時から試合をやるかということには知らないですよ。だから、モノレールを降りて、学友会のガラス張りの（掲示板）がありますね。あそこに、本日の試合とか、今週の試合とか、今月の試合という一覧をバナーと載せると。

高橋（雄介） ああ、それはやったほうがいいんじゃないですかね。

林 それと、私は南平寮に行ったら、入口を入ったところに短冊で優勝チームが書いてあるので、ぜひこれを学内の掲示板に貼ったらどうかと言ったら、最近、優勝チームを張るようになりました。

あれだけでも、学生の関心は違ってくるのではないかと思います。

高橋（善正） そうですね。

林 そういうことをまずやる。試合日に学生全員が授業があるわけではありませんし、一般学生が決して行けないわけではないと思うんですよ。試合日程を大多数の学生が通るところに書いて出しておけば、行こうかという気になると思うのです。

高橋（善正） そうですね。やはり宣伝しないと今の人は動かない。

高橋（雄介） そういう時代ですよ。学校をあげて、そういうことはやっていただきたいと思えますし、学友会だけにお願ひするということは、難しいでしょうけれども、本当はそういう専門集団がほしいですよ。宣伝広告というか。それも結局は、中央大学の名前を上げるため、もしくは母校愛をつくったりするための宣伝ですからね。

「125周年で優勝」して恩返し

林 分かりました。最後に一言ずつ、今後の抱負と、大学に対する要請なり、要望なり、ご注文を含めてでも結構です。

高橋（善正） 私は、就任のときに「125周年で優勝する」「日本一にならないといけない」と、言ってしまったから、それが今やプレッシャーになってしまっていますけれども（笑）。だから、

そこに向かつて、何が何でも選手を鍛える。

勝負事ですから、必ず勝てるとは言わないですけども、このチームなら勝てますと言い切れるだけのチームを、小突きまわしたって何だって、作らなければいけないと思っています。それが最大の目標です。それが達成できれば、もう間違いなく、野球部が大学に貢献したことになるだろうし、強化部としての恩返しができるかと思っています。

世界で戦うには50m室内プールを

林 水泳部の高橋さんは、いかがですか。

高橋（雄介） 要望も入ってしまったんですけども、我々としては長水路の50メートルの室内プールがないと世界で戦えないんです。先ほどから言っているように、世界で戦わないと水泳の場合は、中央大学の名前がなかなかテレビとかに出てきません。いかに世界で戦えるような選手たちを輩出していくか。これが中央大学の名前を上げていくことにつながっていくと、僕は思っています。男子も、女子も。これからは女子の時代にもなってきましたから、そういう展望も考えながら、いろいろ策を練りながら、やっていきたいと思っています。

林 私は、担当の常任としまして、50メートルの温水プールという話を何度も聞かされてきて、ご希望の施設はこの財政状況の中ではき

ついものですが、何とか50メートル温水プールを実現したいということで、あれこれ方策を探っています。最大限の努力はしていますので、もう少し様子を見ていただきたい。

高橋（雄介） はい、よろしくお願ひします。

精神力鍛え、箱根で優勝に絡む

林 最後に浦田さん、いかがでしょうか。

浦田 陸上部は新しい寮を作ってもらったことで、あとは現有の戦力で、タイムを持つていう選手だけではなくて、気持ちの強い選手をつくっていくことが、箱根駅伝でも優勝争いに絡んでいける一番の近道だと思っているので、学校の勉強も含めて、心の強い選手をいかにしてつくるかというのが、これからの自分たちの工夫次第だと思っています。

林 精神力を鍛える近道はないかもしれませんが、いろいろな方法をお考えで実践されているのですか。

浦田 二週間に一回、高尾山で早朝練習するなど多摩地区の環境を使った練習をしています。やはり選手にしっかり考えさせてやるということも必要でしょうし、コーチを含めて、いろいろな角度から取り組まなければいけないと思っています。

林 どうも長時間ありがとうございます。

（この座談会は7月28日に行いました）